

パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソン

小田 敦子

岩倉使節団は1872年6月にボストンを訪問した折にエマソンの講演を聞いた。エマソンが当時の代表的知識人として認識されていたこと、明治・大正の日本へのエマソンの影響を象徴する行事だが、現在ではユニテリアンの日本への影響に言及されることはあっても、エマソンの名前は出てこない。ユニテリアンのカリスマ牧師 W. E. Channing が主導した「self-culture-自己を育てる・文化」に勢いを得たライシーアム運動はアメリカでは知識人から労働者まで広範な聴衆を対象にし、牧師を辞したエマソンがそのような講演と、著作を通じて伝えようとした“the infinitude of the private man”という意識は、キリスト教の型にはまらない新しい民主主義や個人主義の時代を代表する思想として普及した。しかし、そこには根本的に、private と public との葛藤があり、自己の内面に関わることを本領とするエマソンが試みたパブリックの再定義がある。

1. “Self-Reliance”における、パブリックの転覆

‘Self-Reliance’という思想は、周囲と同調すること(conformity)や、ジャクソン流民主主義が始め現在に至る多数を頼む選挙運動など、当時のパブリックな文化に対抗するものとして、自己への信頼を強調し、しかし、同時に、genius’と呼ばれる別の普遍性、「自然」の生成力という普遍的な力を志向する。エマソンの‘Self-Reliance’には、自己放棄、或いは、‘Impersonality’非人格性という自己を離れよう、超越しようとする志向があり、Natureの有名な「透明な眼球になる」という‘Ecstasy’（忘我状態）もその一つの形である。

To believe your own thought, to believe that what is true for you in your private heart, is true for all men,—that is genius. Speak your latent conviction and it shall be the universal sense; for the inmost in due time becomes the outmost,—and our first thought is rendered back to us by the trumpets of the Last Judgment. (“Self-Reliance” 259)

個人の自然由来の生命に基づいた genius に認められる Private なものは Public な自然の法と相互依存的な関係にあり、相互依存性(reciprocity)はエマソンの大きなテーマであり、上記引用の内なるものがやがて外に出てくるという過程は、物事が自然の長い時間のなかで形を変える‘Compensation’の運動だが、それも一つの相互依存性の発現であることを示している。

Every thing in nature contains all the powers of nature. Every thing is made of one hidden stuff; as the naturalist seems one type under every metamorphosis,

The world globes itself in a drop of dew. The microscope cannot find the animalcule which is less perfect for being little. (“Compensation” 289)

‘Compensation’を「私人の無限性」の根拠となる自然の法として説明するのがこのエッセイの眼目で、エッセイを要約する格言的な一文、「世界は一粒の露のなかに球形をとる」は「私は透明な眼球になる」と同様、宇宙の有機的な全体性を表現する。それをエマソンは「パブリック」な領域として再定義する。ソローが小屋を建てたエマソンお気に入りのウォールデン湖畔の白松の森での思索を示す詩、“Woodnotes I”では、松の根元に座る人は周囲の山や雲にそれらとの近親性ゆえに知られた存在、人間を自然の“public child”と呼んでいる。これは忘我状態を表現するとともに、宇宙の始原からの進化の結果として人間をみる進化論的な見方を示している。エマソンは露の一滴と同じように1人の人も成っていく世界を体現していると考えている。「一滴の露」の引用は、日本でもよく知られた William Blake の「一粒の砂に世界を見る」という詩と似ているが、大きく違う点は、エマソンは明らかに、科学的な思考でキリスト教の修辞を更新しようとしていることだ。

2. 新しいパブリックを代表する「詩人」

“Self-Reliance”からの引用で、‘spirit’ではなく‘genius’という言葉を使うように、正統的なキリスト教の用語との対立は、人は“nonconformist”でなければならないというよく知られた一節でより明白に表現されている。

No law can be sacred to me but that of my nature. Good and bad are but names very readily transferable to that or this; the only right is what is after my constitution, the only wrong what is against it. I shun father and mother and wife and brother, when my genius calls me. I would write on the lintels of the door-post, *Whim*. I hope it is somewhat better than whim at last, but we cannot spend the day in explanation. (“Self-Reliance” 261-62)

エマソンはコンコード植民地創設以来の牧師の家系の一員で、聖書への言及に溢れるが、引用後半の「私のジニアスが呼ぶとき」は『マタイ伝』のイエス・キリストの言葉、イエスに従う者は家族が敵になるという一節を変形したもので、このキリストに代わる「ジニアス」は宗教上の指導者からは下からの、悪魔的な力を疑われていることを考えると、エマソンの「私の性質の法以外、神聖でない、私の体質に従ったことだけが正しい」と言うのは、ハック・フィンと同じくらい wild な発言だ。賛否両論を巻き起こしたエマソンの wild さ、偶像

破壊的言説の衝撃が想像される。

エマソンの墮落した人間にキリスト的な神性を認めるという考えを励ましたのは、W. E. チャニングの最も先鋭な説教、“Humanity’s Likeness to God” (1828)をはじめとする説教が示した人間の善性への信頼の表明であり、そのための自己修養の必要性だ。チャニングは1839年にはボストンで労働者を対象に3回連続講演“Self-Culture”を行い、今の時代の幸福な特徴として、大衆が「知性、自尊心、様々な生活の安楽」(Channing 55)の面で進歩したことをあげ、「個人」として重要性をもつ時代にふさわしい人であることを勧める。エマソンも、チャニングを継承して、個人の強化のために“Culture”の重要性を説くが、それをNatureとの組み概念にした。1836年発表のNatureは、ユニテリアンの友人たちからさえ、冒濫的だと批判されたが、エマソンは自身の自然観が必要とされていないことを“Woodnotes I”などの詩でぼやきながらも、それを表現する方法をPoet, 「解放する神、liberating god」である詩人に託して、野心的な試みを続ける。

The breadth of the problem is great, for the poet is representative. He stands among partial men for the complete man, and apprises us not of his wealth, but of the common-wealth. The young man reveres men of genius, because, to speak truly, they are more himself than he is. (“The Poet” 448)

詩人を人々を代表するパブリックな存在、人々が気づいていない、privacyに潜在する、無意識的な、自然の法、或いは、ジニアスを表現する人と定義する。Common-wealthは共和国、或いはマサチューセッツ州の州に当る言葉だが、文字通り、人々に「共通の富」である、自然の創造力を表現することで、それへの意識が共有されることを図ろうとする。エマソンの詩人は皆の出来ないことをすると同時に、代表であるためにその普遍性が共有されることで現実性を証明する必要もあり、代表として、パブリック・インテレクチュアルになるというのはエマソンの思想が要求していることでもある。Natureに基づくCultureを伝えて行くことになる。

3. Nature と Culture

文化と自然、ノモスとピュシスは古代ギリシア以来の対概念で、プラトンについても融合者として、インドとヨーロッパの思想を融合させたことを評価する。ヘレニズムとヘブライズム接続の伝統の代表者としてのプラトン像に対して、プラトンはthe divineを付け加えたと賛意を装いながらも、エマソン自身の人間に内在する“the divine”を提示する。Natureとcultureがエマソンにとっても不可分の関係にあること、そして、できるだけnatureを強調したいことは、Essays: Second Series (1844)中のエッセイ“Manners”で使われるThomas Jeffersonを更新した“natural aristocracy”という言葉にも表れる。“Natural Aristocracy”はイギリスでの講演、その後の中西部での講演でも演題に使われた。Conduct of Life (1860)でも同じで、“Manners”の改訂版といえる“Behavior”の冒頭では、「自然を活性化する魂」と魂の優位を保証しながら、魂を司る神性はGeniusであり、「活性化された身体」は洗練された人間の印であると、身体性の美にも注意を引いている。

Conduct of Lifeはいかに生きるかという実践的な問題を扱いながら、個人の限界から、段階的に、人間が自然と共有する普遍的な生命の「力」や「富」に向かうことを説き、そのための自己陶冶、個人が支える民主主義にふさわしい「公共の」文化を育てようとする。奴隷制問題を機に、パブリック・インテレクチュアルとしての使命を自覚し、より実生活に即したわかりやすい表現を心がけるようになり、自然は「与える者」であり、豊かな者であるという自然の体質を受け継ぐ人間として、自分の生活だけでなく「共通の富」に資することを促す。しかし、同時に、“Power”において繰り返された“plus”という言葉は、過剰な人、冒険的、投機的な時代の空気を励まし、現世的な公益性を説得する効果も大きかっただろう。The Conduct of Lifeは、Society and Solitude(1870)と共にエマソンのエッセイの中ではよく読まれた。ハーバード大学がエマソンに法学博士の名誉学位を与えるのは1866年、Natureから30年経って、エマソンはpublic intellectualとしての地位を確立する。

エマソンのパブリックの概念を支える自然観は、1859年にダーウィンが進化論を発表するように、50年代には知的な物質主義を予告するものだった。しかし、当時も現在もエマソンにとっての自然や科学の重要性は十分に継承されてこなかった。その理由の一つに、現在については科学と文学の分裂が進んだことがあるが、科学的な自然観を基に人間の精神性を考えたエマソンは、科学が独走する現代、多様性のなかに普遍性を見つける必要のある現代において、再び、パブリック・インテレクチュアルとして参照されるべき存在と言えよう。

参考文献

Allen, Gay Wilson. *Waldo Emerson: A Biography*. Viking, 1981.

Emerson, Ralph Waldo. *Essays and Lectures*. Edited by Joel Porte, Library of America, 1983.

Poirier, Richard. *Poetry and Pragmatism*. Harvard UP, 1992.

Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire: A Biography*. U of California P, 1995.

Robinson, David. *Apostle of Culture: Emerson as a Preacher and Lecturer*. U. of Pennsylvania P, 1982.

Walls, Laura Dassow. *Emerson’s Life in Science: The Culture of Truth*. Cornell UP, 2003.